

文化服装学院円型校舎の形態構成と空間構造に関する研究

A Study on Formal and Spatial Compositions of the Circular Type School Building of Bunka Fashion College

種田 元晴

Motoharu TANEDA

要旨

長きにわたって学校法人文化学園を象徴する建築物であった「文化服装学院円型校舎」は、円形校舎が各地に相次いで建てられ、建築界を賑わした時代に竣工した。その先駆例は、文化服装学院の前年に竣工した「山崎学園富士見中学・高等学校」であった。富士見中学・高等学校は、坂本鹿名夫の設計による。坂本は以降、数多くの円形校舎を手掛けた。しかし、「文化服装学院円型校舎」は坂本の手によるものではなく、三菱地所の杉山雅則の設計である。本稿では、坂本による円形校舎と「文化服装学院円型校舎」の形態構成と空間構造を比較することにより、その共通点および差異を検証した。その結果、「文化服装学院円型校舎」は、坂本鹿名夫による実用新案である円形校舎がつくられた時期に、坂本の承認を得て、坂本の考案した円形校舎の利点を取り入れながら計画されたものであることが明らかとなった。また、坂本による一連の円形校舎が経済性を追求し、合理性を満たすことを目的とした建築であったのに対し、「文化服装学院円型校舎」は仕上げや設備を高級に設えた象徴性の追求された建築としてつくられたものであり、両者は設計趣旨のまったく異なったものであることが明らかとなった。

●キーワード：円形建築 (circular architecture) / 杉山雅則 (Masanori Sugiyama) / 坂本鹿名夫 (Kanao Sakamoto)

I. はじめに

1. 研究の背景と目的

「文化服装学院円型校舎」(図1)は、その特徴的な円筒形状の外観によって、1955年の竣工から1998年の解



図1 「文化服装学院円型校舎」全景 (1955)

体までの長きにわたって学校法人文化学園を象徴する建築物であった。一方で、「文化服装学院円型校舎」が竣工した当時は、円形校舎が各地に相次いで建てられ、建築界をにわかに賑わした時代でもあった。

一連の円形建築ブームを引き起こした先駆者は、建築家の坂本鹿名夫(1911-87)であった。坂本は、1953年に雑誌発表された「金城高等学校」(図2)や、1954年に竣工した「山崎学園富士見中学・高等学校」(図3)を皮切りに、次々と円形平面の校舎建築を実現し、ついには1955年に「円形校舎」を実用新案登録するに至る。

しかし、「文化服装学院円型校舎」の設計者は坂本ではなく、施工管理も坂本の2作品とは異なる会社が請け負った。もはや、円形校舎といえば坂本の代名詞であるかのような印象がつけられつつあったと考えられる状況のなかで、「文化服装学院円型校舎」は他者の手によって落成を迎えたのである。

このような背景を踏まえつつ、本稿では、「文化服装学院円型校舎」について、同時代の他者による類似の建築、すなわち坂本鹿名夫による「円形校舎」と比較することによって、「文化服装学院円型校舎」の形態構成お

よび空間構造における独創性を明らかにすることを目的とする。

研究は、当該建築物が既に現存しないことから、これまでに発表された書籍・雑誌記事等を用いて行う。なお、研究の再現性の担保のため、原則として一般に公開された資料を用いて検証を行うこととする。

2. 既往の研究と本研究の意義

「文化服装学院円型校舎」については、文化学園の発行する年史や年譜^{[1][2]}、竣工当時の雑誌発表記事等^{[3][4][5][6][7]}を除いて、これを主体的に論じられたものは管見の限り見当たらない。

ただし、例えば、森山による論考^[8]、梅宮による論考^[9]、川崎らによる論考^[10]などに「文化服装学院円型校舎」についてわずかに触れられている。しかし、これらはいずれも坂本による円形建築の特徴を明らかとすることを目的とした論考であり、その補足説明として「文化服装学院円型校舎」を引き合いに出したものであって、「文化服装学院円型校舎」そのものを論じたものではない。

本研究では、「文化服装学院円型校舎」そのものについて、坂本の作品も引き合いに出しながら、その形態的・空間的特徴を論じる点に新規性を有すると考えられる。

3. 論文の構成

本稿の構成としては、まず、当時の雑誌記事および年史に基づいて、「文化服装学院円型校舎」の建築物としての概要を示す。

次に、「文化服装学院円型校舎」の設計者である三菱地所建築部の杉山雅則について簡潔に述べ、その設計時期を推定し、そこに込められた設計理念を確認する。

これらを踏まえて、1954年以降に円形校舎の先駆例

を手掛けて建築界に大きな影響を及ぼした坂本鹿名夫の一連の円形建築と「文化服装学院円型校舎」との関係、建築の形態および校舎名称などに着目して検証する。

最後に、本稿で得られた知見を整理し、「文化服装学院円型校舎」の形態的・空間的な独創性に言及する。

II. 「文化服装学院円型校舎」の概要

「文化服装学院円型校舎」は、1954（昭和29）年の10月に起工され、翌1955（昭和30）年8月に竣工¹⁾、同年の文化祭の2日前にあたる10月31日に落成式が行われた²⁾。

なお、円型校舎落成時には「文化服装学院円型校舎落成記念コスチュームショー」が開催されている³⁾。

建築物の規模は、建築面積約1100㎡、延床面積約8200㎡、直径約31mの円形の平面形状を持つ大規模なものであった。

高さは、当時の法規である市街地建築物法に規定された許容限度である31m（100尺）の高さを誇る高層建築で、階数は地上9階地下1階までの10層に3層の小さ



図3 坂本鹿名夫「山崎学園富士見中学・高等学校」（1954）

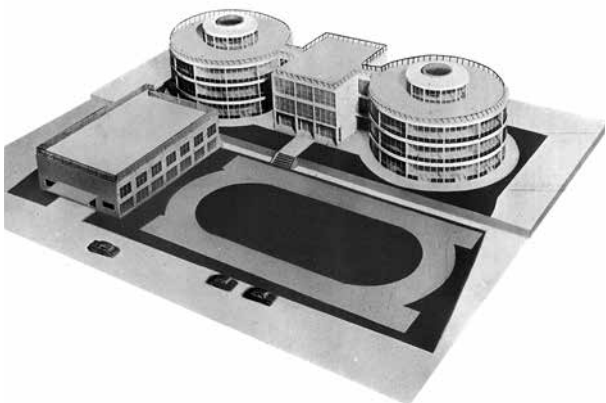


図2 坂本鹿名夫「金城高等学校」模型写真（1952）



図4 落成当時の円型校舎とその周辺（1955）

な円筒の塔屋が載った13層にわたる。図4に示した校舎落成当時の写真より、周囲の低層の街並みに対して、ひとときわ白く高くそびえてる様子がわかる。

円型校舎が竣工した翌年の「装苑」に掲載された漫画家・富田英三（1906-1982）の記事では、この校舎のそびえる様子が次のように記されている^[12]。

アメリカに行ったときの話です。化校（筆者注：文化服装学院）の、例のあの円型校舎の写真をあちらの人に見せると『ホテル？』とききかえすのです。（中略）とにかくこんな立派な校舎をもって一万人とかの生徒を擁している学校は、ニューヨークにも、またパリにもないのです。（中略）僕は、今も、時々、文化服装学院を訪れます。新宿駅から甲州街道を歩いていくのですが、それが、学校の退け時とぶつかる時とさア大変です。

あの歩道を、えんえんと帯になって、百花繚乱、花園のように埋めて歩く生徒の数です。

また建築学者の今和次郎（1888-1973）は、竣工後5年が経った年、校舎建設に尽力した理事長の遠藤政次郎（1894-1960）が死去した1960年の暮れに、この校舎について次のように記している^[13]。

朝と夕、国電新宿駅から通学の学生たちは、歩道の上を、まるでベルトコンベアーで運ばれているかのように、あのエントウ校舎に吸いこまれ、また吐き出されている状況を見たことのある人ならば、学院の偉容にうたれるはずだ。しかもあの校舎は、孤立している存在ではなくて、全国に三一〇の連鎖校をかかえている、そのセンターなのだ。

いずれの言説からも、駅から学校までの道を埋め尽くすほどに多くの学生がたちどころに誘導されうるほどの象徴性が、円型校舎にあったことがうかがえる。

「文化服装学院円型校舎」は、数多くの学生を受け入れる体積をもちながらも、その学生らが一斉に大挙して訪れる際に人だまりとなるべき広場を確保すべく、最少の底面積となる円形の平面と、塔状の立体構成が採用されたと推察される。またその円筒形態が「センター」としての偉容をも示していたものと考えられる。

Ⅲ. 設計者・杉山雅則

「文化服装学院円型校舎」の設計者は、三菱地所建築部の杉山雅則（1904-1999）である。文化学園創立八十年に際して発行された冊子に再録された文化学園前理事長・大沼淳による1963年の聞き語り（以下、「年史」と記す）^[1]によれば、円型校舎は、「三菱地所株式会社建築部の新鋭技師杉山雅則氏にその設計を依頼」とある⁴⁾。

以下、杉山の経歴を簡潔に述べる⁵⁾。

杉山雅則は、1904年に生まれ、日本大学芸術学部の前身である専門部美術科を卒業したのち、英語を操れたことから、聖路加病院院長トイスラー博士のもとで新しい病院の計画を図面化するためにまず雇われた。しかし新卒で経験が浅かったことから、設計はアントニン・レーモンド（1888-1976）に依頼されることとなり、1921年に杉山はそのままレーモンドが開設したばかりの米国建築合資会社（後のレーモンド建築事務所）に移籍した。

レーモンド事務所では、吉村順三（1908-1997）や前川國男（1905-1986）など後に日本の建築界をリードする所員や、アメリカで建築を学んだ所員らに囲まれながら、第二次世界大戦前夜にレーモンドのアメリカ帰国に伴って事務所が閉鎖される1941年まで勤務し、東京女子大学やスタンダード石油横浜事務所、レーモンド自邸など数多くの作品を担当した。

その間、レーモンドはアメリカやヨーロッパの雑誌を定期的にとりていて、所員たちにもこれを見せていたという。杉山は早くから外国の建築作品に通じていたと考えられる。

1942年に杉山は三菱地所に入社、定年を迎えて以降の1983年まで勤めた。1999年に死去する。三菱地所では、「大手町ビルディング」（1958）を手掛けたほか、「丸の内総合改造計画」（1959）に関わる31mのオフィスビル等の設計を担当した。

杉山が文化服装学院を手掛けた頃は、杉山が三菱地所に中途入社して10数年が経過し、50歳前後となつてすでにベテランの域に達していた頃であった。

Ⅳ. 「文化服装学院円型校舎」の設計時期

「文化服装学院円型校舎」については、着工年および竣工年は明らかとなっているものの、設計開始年が明らかでない。設計案が企画された時期について、「年史」には次のような記述がある⁶⁾。

昭和二十六年には木造による一応の校舎建設工事は終わったが、時代の進展につれ、教育施設の近代化も急がねばならなかった。昭和二十八年完成の鉄筋五階建ての現第二校舎に続いて、本校舎建設の企画が進められていた。

「第二校舎」（方形校舎：現存せず）の竣工は1953年6月である⁷⁾。この時点ではすでに「企画が進められていた」とのことであるので、企画がまとまり本校舎（円型校舎）の設計が具体的に開始されるのはこれ以降であったと考えられる。

一方、1954年の10月2日には新校舎の建設が始まっているので、建築の設計はそれ以前に行われているはずである。

すなわち、「文化服装学院円型校舎」の設計期間は1953年6月頃～1954年9月頃の間であったと考えられる。

V. 「文化服装学院円型校舎」の設計理念

文化服装学院の新校舎建設にあたっての理事長・遠藤政次郎の理念について大沼は「年史」に以下のように記している⁸⁾。

遠藤理事長の頭には、伝統に輝く文化服装学院の本校舎にふさわしく、洋裁教育界の象徴的存在となり、かつデザイン的にみても建築物としても画期的で本格的なものにしたいという強い念願があった。

つまり、当初より、施主側からは象徴性の高い建築が要望されていたということである。

「年史」にはまた、杉山がその設計趣旨を次のように述べたことが引かれている⁹⁾。

敷地の中に建物がたくさん建っているが、統一がありませんでした。ここに本校舎として校舎全体の軸となるもの、名実ともに学校の中心となるようなものを考えました。三つほどの案を学院長のところに持って行きました。一つは扇形、それから円形、そして普通の方形のもの。結局円形が採用されたのです。これは非常な英断で、結果からみてもたいへんよかったです。円形にすると長方形のものより外壁の長さが短くてすみます。教室の窓についても、各教室が扇形となるため、面積は同じでも、窓の長さが四角な校舎より長くなり、それだけ教室

が明るくなります。エレベーターを中心にもってくれば各教室までの距離は短くもなります。このような利点が多くありますが、更に重要なことは、でき上がったものは“学校の校舎として記念性のあるものを”という願いを十分に満たしてくれたのです。

つまり、円形は、はじめからそれありきのものではなく、複数の可能性の中から杉山によって提案された形態であった。

遠藤はこれを選択するにあたって次のように語ったという¹⁰⁾。

建築上のこともあるけれど円いということは、すべてが円く円満におさまり、学校の教育のシンボルになると思った。一つの中心があってすべてが公平になり、さらに中心からどこまでも同形が広がる。

建築の形態の持つ象徴性と、中心性が担保する公平性、ひろく世に存在を示そうとの発信性などが新校舎の建築物に期待されていたといえる。

VI. 「文化服装学院円型校舎」と

坂本鹿名夫の『円形建築』

ところで、先に引いた杉山の設計趣旨のうち、「結果からみてもたいへんよかったです」以降の具体的な性能の説明部分は、坂本鹿名夫が考案した「円形校舎」の利点をそのままに体现したものとなっている。

坂本は円形平面の利点を以下の7つに整理している¹¹⁾。

- (1) プランの合理性（教室が扇形となって音響効果もよい）
- (2) 構造の経済性（自然界の形のうち円が最も強い）
- (3) 材料の経済性（円は同一面積の図形のうち最も周長が短いので、外周部の材料が少なく済む）
- (4) 敷地の節約（狭い土地でも建てられる）
- (5) 日照及び陰影の利点（扇形のため、北側の部屋でも弧状の窓の一部から日照が確保できる）
- (6) 通風の利点（外周部の抵抗が少なく、中央の塔屋部分から煙突効果で風が抜ける）
- (7) 設備の経済—配管、配線上の利点（中心部に上下階同じ位置に縦コアをつくれるので省スペース化が図れる）

逆に、欠点としては、北側の日照時間が短いこと、密集市街地などの四角い敷地の場合には敷地の四隅が有効

に利用しにくいこと、増築がしにくいことなどを坂本が自ら挙げている¹²⁾。

さらに、円形の、とくに校舎建築の場合の利点について、坂本は以下の4つに整理している¹³⁾。

- (8) 管理がしやすい（見通しがよく、セキュリティが高い）
- (9) 歩行距離が短い（利用しやすく避難がしやすい）
- (10) 同一面積の他形状に比べて収容力が大きい（隅角部が存在しないので多人数が集合しやすい）
- (11) 教室が扇形となり使いやすい（教師と生徒の距離が近いので、学生は集中しやすく、教師は掌握しやすく、視野が広い／背面のみが窓となるため黒板が光りにくく、側面の壁が掲示板等に有効活用できる）

先の杉山の言説の「円形にすると長方形のものより外壁の長さが短くてすみます」の部分は、上記の(3)にあてはまり、「教室の窓についても、各教室が扇形となるため、面積は同じでも、窓の長さが四角な校舎より長くなり、それだけ教室が明るくなります」の部分は(5)に通じ、「エレベーターを中心にもってくれば各教室までの距離は短くもなります」の部分は(9)にあてはまっている。

なお、坂本は自身の設計方針に関して次のように述べている¹⁴⁾。

私の建築に対する信念はまず、最も経済的に造る、と云う事である。建築はまず目的にかなつたものを、最少の経費即ち最少の空間、材料及び維持費等でまかなう事から出発する事。私は自らこのやり方を純粋機能主義と呼んでいる。

これに続き坂本はさらに、「私は只々美を造る事のみ目的としたような建築を嫌悪する。(改行)私は美と云うものは自然に出て来るものであつて、創るものではないと信ずる。」とも述べている。

つまり、坂本の設計方針は、経済性への配慮を第一義としたものであり、機能を伴わない装飾を施したり、単に美観を目的とした形態操作を行うことはしないとの意思が表明されている。

上記の円形校舎の利点を主張し、これを広めようとした坂本であったが、しかし、「その実施に当つては、関係各官庁の種々の制肘に会い、且つ現在法規が、主として角形建築を対照とするために、甚だ法規の解釈に困難

を来し」た状況であったという¹⁷⁾。

矩形平面に比して経済性・合理性に優れながらも、普及していない新規な形態であるがために、従来の矩形平面を前提とした法令を円形平面へと適合させることにひとかたならぬ労力を割いたことがうかがえる。坂本にとって、円形校舎はそれほど思い入れたものであった。

坂本はその思い入れをより確かなものとすべく、円形校舎の一連の条件を「実用新案」として登録した。その理由について、坂本は以下のように述べている¹⁷⁾。

私の所謂『円形校舎』（この名称すら私が附けたが）を新案特許（米国では新案も特許も区別しない）にした所以は校舎と云える極めて重要な建物にこの様な特異な機構を施した場合は在来の角形校舎に比し設計が特殊であり、根本原理を充分熟知した上でなく単なる外見からの模倣では危険であり教育上恐るべきものとなる。しかるに私の第一回金沢市金城高校及第二回東京山崎学園等がチャージャーリズムの喧伝する処となるや識者の内には半信半疑の方も多し内、一方半知半解の士が似て非なる不十分な設計を只平面が似て居るからとのみの理由で私の作を前例にとり取締当局に建設許可を迫る等由々しき問題を惹起するに至つた。此が対策として意図した、円形校舎が世の中の人によく判つて貰へる迄防護する手段として特許にしてはと友人達の注意あり心ならずも出願し計らずも許可が下りた次第である。

これに加えて、坂本は「当方が全然知らぬ間に建ち、見たこともない」円形校舎が日本各地に散見されるようになったことを嘆いている¹⁵⁾。つまり、坂本は、円形建築が同業者らに知れ渡るや、坂本の経済性追究を旨とした設計理念を理解しないままに、坂本に無断で形態のみを真似るまがいものが増えてきたことを快く思わず、実用新案を申請したのであった。

申請にあたって坂本には、「作者としては、苦勞した作品であるから大事に育てて貰いたい。円形校舎というのは斯ういう風に作ればいいのだという事が、丁度角形の校舎がどんな素人が作つても大過なく出来ると同じように、これだけの理屈を心得れば大過ないものが出来るということが判るまで、作者がそれを烏譚がましいようだが指導してゆく」との心構えがあった¹⁶⁾。

ところで、「文化服装学院円型校舎」は坂本のあずか

り知らぬところで設計されたものでは決してなかった。
坂本は以下のように記している¹⁷⁾。

作者の作品ではなく他の設計者又は建築主より直接又は間接に模倣する事を申し入れて建築されたものは次の五校である。即ち東京新宿文化服装学院(三菱地所部)、滋賀県安土町立中学校(田中、小西設計事務所)、大阪府松蔭女子学園(大阪建築事務所)、仙台常盤木学園(山下寿郎事務所)及び兵庫県波賀町立引原小学校(高橋事務所)、千葉県習志野市立高校他一校(東京設計事務所)。

先に引いた「年史」中の杉山による設計趣旨の説明では、案は杉山が扇形、円形、方形の3つを学院長のところにもっていったとあったので、上述の坂本の「他の設計者又は建築主より直接又は間接に模倣する事を申し入れて」のうち、文化服装学院に関しては、建築主ではなく設計者が直接又は間接に坂本に承認を得て案を作成したものと考えられる。

なお、この文に続き坂本は「これらのうち、あるものは仕上や設備は申分なく又豪華なので工費も莫大であり」とも指摘している。さらに続けて、「建築というよりも寧ろ広告塔のようなものもあり円形校舎とはかかる軽兆なものであるかの如き印象を与え、心ある教育関係者が円形校舎を正しく認識するのを妨害するかの感のあるものも出来た」とも述べている。

この部分が指すものが文化服装学院の校舎であるかは定かではない。しかし、坂本が経済的かつ合理的・機能的につくることを第一義として円形平面を追究したのに対して、文化服装学院の方は、高層とし、エレベーターを入れ、設備を充実させるなど、高級化させることでその機能を充足させるものとなっていたので、坂本の円形校舎とは形態こそ類似性の高いものではありながら、その設計思想は異なったものであったと考えられる。

ところで、「文化服装学院円型校舎」の総工費に関して、「年史」には、「総坪三千坪に及ぶこの建物には数億円を必要とした」との記述がある¹⁸⁾。総工費の具体的な数値は明らかでないが、「数億円」という表現から、おそらく2~3億円以上は資金が必要であったと考えられる。

実際の総面積は、「三千坪」には届かず、2498.2坪(8257.8㎡)であったので、坪単価は約8万円/坪~12万円/坪以上はかかったものと考えられる。なお、坂本

の手による円形校舎について坂本は、「大体設備及び浄化槽等一部の外部設備も具へて4万円前後であり(文部省最低基準は5万7千円)」¹⁹⁾と述べている。すなわち、「文化服装学院円型校舎」は、坂本鹿名夫の円形校舎に比して約2倍以上の工費がかけられた高級なものであったと考えられる。

冒頭に述べたとおり、「文化服装学院円型校舎」が建設された時点では、坂本の円形校舎の実現例はわずかに「金城高等学校」と「山崎学園富士見中学・高等学校」の2校のみであった。このうち「金城高等学校」は坂本によれば「充分作者の意図を実現したものとはならなかった」²⁰⁾とのことであるので、実質的な実現作の第一号は、「金城に比して作者の設計意図が充分発揮出来た」²¹⁾と坂本自らが述べる「山崎学園富士見中学・高等学校」であった。

そこで、この坂本の設計理念が十分に発揮された「山崎学園富士見中学・高等学校」円形校舎と、「文化服装学院円型校舎」の建築を比較してみたい。

VII. 「文化服装学院円型校舎」と

「山崎学園富士見中学・高等学校」円形校舎

1. 建築概要の比較

表1に、両者の建築概要を示す。

まず、「山崎学園富士見中学・高等学校」に比して、「文化服装学院円型校舎」の面積および高さなど、規模が相当大きいことがわかる。また、暖房設備などを比較しても、山崎学園では部屋ごとに空調する石炭ストーブが採用されているのに対して、文化服装学院は空調機械室を別途設けて全館一元の大規模な空調方式を採用している点で高級であることがわかる。

内外の仕上げにも着目したい。文化服装学院では、石材の多様や人造石等による現場での装飾的加工が多く施されているのに対して、山崎学園の方は、用いる素材の種類を極力減らし、かつ簡素に仕上げることとしている。ここにも、象徴性を担保すべき美観に注力する「文化服装学院円型校舎」と、過不足のない空間の機能充足と経済性を追求する坂本の円形校舎との差異が明確に見て取れる。

なお、図1に示した「文化服装学院円型校舎」の外観と図3に示した「山崎学園富士見中学・高等学校」円形校舎の外観を見比べてみると、すべての階を同等に簡素に仕上げている山崎学園に対して、文化服装学院の方は、1階上部の庇をドレープ状のシェル構造としたり、

表1に示したように玄関出入口廻りの仕上げ材料を特別にあしらうなど、建物の顔となるべき1階部分がとくに装飾的に施されていることがわかる。

また、坂本の手による円形校舎は概ね3階または4階のものが多く、最高でも5階建である²²⁾。高層の「文化服装学院円型校舎」は坂本の手掛けていない規模の校舎建築である点でも、坂本の円形校舎に込めた理念がそのままにはあてはまらない可能性があるものであったと考えられる。

2. 平面構成の比較

次に両校舎の平面構成を比較したい。図5に両校舎の基準階平面図を同縮尺で並べたものを示す。山崎学園の直径は外壁芯で約26m、文化服装学院は約31mと山崎

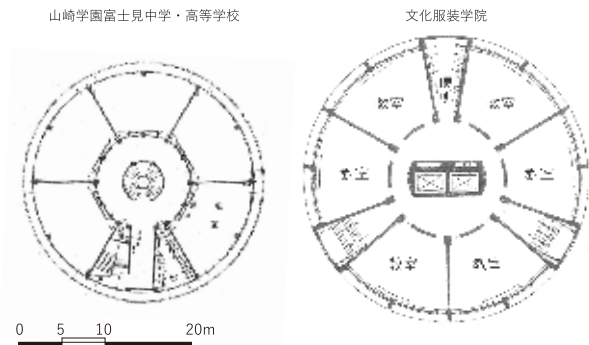


図5 基準階平面図の同縮尺比較

学園に比して大きいことがわかる。

山崎学園の方は円を6等分し、そのうちの南端側以外

表1 「文化服装学院円型校舎」と「山崎学園富士見中学高等学校円形校舎」の建築概要

作品名	文化服装学院円型校舎	山崎学園富士見中学・高等学校円形校舎
所在地	東京都渋谷区代々木山谷町185（現・渋谷区代々木3-22-1）	東京都練馬区中村町3（現・東京都練馬区中村北4-8-26）
設計	三菱地所株式会社建築部（杉山雅則）	建築総合計画研究所（坂本鹿名夫）
施工	鴻池組	清水建設
延床面積	2498.2坪（8258.5㎡）	474.22坪（1567.6㎡）
建築面積	332.2坪（1098.1㎡）	148.5坪（490.8㎡）
基礎工法	木田式深礎地業（場所打ち杭基礎）23基（深さG.L.より20.2m）	布基礎
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造	鉄筋コンクリート造
階数	地下1階、地上9階、塔屋3階	地上3階、塔屋1階
高さ	地盤よりパラベット上端まで31m（塔屋上端まで38.6m） 基準階の階高約3.3m	地盤よりパラベット上端まで13m（塔屋上端まで17.2m） 基準階の階高約3.8m
総工費	推定2～3億円（推定8～12万円/坪）	2500万円（5.3万円/坪）
起工	昭和29（1954）年10月2日	昭和29（1954）年7月15日
竣工	昭和30（1955）年8月16日	昭和29（1954）年12月15日
暖房設備	真空式低圧蒸気暖房（中央熱源方式）	石炭ストーブ（個別分散方式）
エレベーター	積載量2500kg（定員25名）2基（90m/m、自動着床式）	なし
外部仕上げ	1階玄関出入口廻り：柱上部一部及び玄関庇下端（キーンセメント仕上げ）、独立柱（セラストーン貼り）、壁（二丁掛タイル貼り）、巾木（テラゾブロック）、床及び段石（花崗石小叩き） 一般外壁：柱型（人造石研ぎ出し）、窓下スパンドレル（二丁掛タイル貼り）、鋼製建具（引違い）	一般外壁：柱及び壁（色モルタル吹付け）、要所（シリコン防水塗料）、露台（防水モルタル）、建具及び枠（木製ペンキ塗り）
内部仕上げ	1階ホール：天井（二重天井・プラスター）、壁（モルタル塗りコーポリットスレコート仕上げ）、巾木（テラゾブロック）、床（テラゾ現場研ぎ出し） 基準階ホール：天井（二重天井・プラスター）、壁（プラスター）、腰壁（モルタルオイルペンキ塗り）、巾木（人造石研ぎ出し）、床（人造石研ぎ出し） 基準階教室：天井（吸音プラスター・ゾノライト吹付け）、壁（プラスター）、巾木（モルタルオイルペンキ塗り）、床（マッシュク）、連結教室間仕切り（折り畳みドア）	一般部：天井（プラスター）、梁（プラスター）、柱（モルタルコテ押え）、壁（モルタル）、便所スクリーン（フレキシブルボード貼り）、巾木床（レキシウム）、建具（ラワン材オイルステンワックス仕上げ） ホール：天井（吸音材貼付）、壁（吸音ブロック化粧積み）、床（レキシウム葉緑色） 教室：天井（二重天井・プラスター）、壁（ハードテックスペンキ塗り）、床（レキシウム濃緑色）

表1注）文化服装学院は参考文献 [3]-[6] を参照して記述。山崎学園は参考文献 [16] および [18]-[20] を参照して記述。

はすべて教室となっている。南端部は、便所および階段などの日照・採光の不要な室があてがわれているが、これは、南側が日照に優れる一方で日射による熱負荷が大きいことへの配慮がなされたものであると考えられる。

一方の文化服装学院は、中心にエレベーターのみを配し、二方向に避難するために必要な2つの階段は外周部に配置されている。2つの階段が分散配置されている文化服装学院の階段配置の方が、階段が近接している山崎学園に比べて避難上の安全性は高いと考えられる。これは、文化服装学院が高層のために、低層の山崎学園に比してより多くの利用者を合理的に避難させるために必要な措置であったとも考えられる。

また、日照条件のよくない北側については便所が挿入されており、坂本の円形校舎が抱える欠点を改良し教室の快適性により配慮している様子も見受けられる。なお、2つの階段が教室間に挿入されることで、騒音対策にも有効となる利点も見受けられる。

これらの便所及び階段が6つの教室の間に点対称に挿入されることで、求心性が保たれたまま単調でない外観を形成することにも一役買っているものと考えられる。

VIII. 坂本鹿名夫の実用新案「円形校舎」と文化服装学院「円型校舎」

文化服装学院の当該校舎建築は、文化学園による正式な呼称として、いずれも「円型」校舎との字義が当てられている。一方の坂本による一連の校舎建築は、坂本の手になる記事等にはすべて「円形」校舎として記載されている。

その標記の違いを短絡的に考察すれば、前述のとおり、文化服装学院の円型校舎は、坂本の手には寄らないものの、坂本に模倣することを申し入れたうえで承認を得てつくったものであるため、坂本のオリジナルである「円形」とは区別するべく「円型」と記すこととしたものと考えられる。

もう一步踏み込んで、「円型」と「円形」の字義的な違いをあえて指摘しておけば、「型」は標準化された様式を示すのに対し、「形」はものの具体的な姿そのものを指すことが多い。とすれば、後発である文化服装学院の側に、校舎を計画する頃にすでに坂本により普及が進んだ「矩形」でない「円形」の平面形状が校舎建築のひとつの標準化された様式となったことに敬意を払って、「円型」との語を用いたと推し量ることもできよう。

ところで、先述のように坂本は、「円形校舎」を実用

新案に登録していた。これを踏まえてさらに推測をすすめれば、この実用新案登録に抵触しない別物との主張を明確に打ち出すために、字義の異なる「円型校舎」との語があてられたものとも考えられる。

IX. まとめ

本稿では、坂本鹿名夫による円形建築と、杉山雅則による「文化服装学院円型校舎」の形態構成および空間構造を比較することにより、「文化服装学院円型校舎」の形態的・空間的独自性を検証した。

本稿で明らかとなったことを以下にまとめる。

- ・「文化服装学院円型校舎」の設計期間は1953年6月頃～1954年9月頃の間であったと考えられる。

- ・「文化服装学院円型校舎」は、坂本鹿名夫による実用新案円形校舎がつくられた時期に、坂本の承認を得て、坂本の考案した円形校舎の利点を取り入ながら計画されたものであった。

- ・坂本の先駆例「山崎学園富士見中学・高等学校」円形校舎との建築概要の比較により、規模や仕上げ材料、設備などのいずれもが「文化服装学院円型校舎」は高級に設えられていることが確認できる。また、基準階平面図の比較により、山崎学園では円を6分割して南端側以外の外周部がすべて同一サイズの教室の窓面となっているのに対して、文化服装学院の方は円を9分割し、教室の間に階段や便所等が挟まれることで外周部が単調なガラス面とならない工夫が施されていると考えられる。

- ・坂本による一連の円形校舎が工事費および維持費が廉価となるよう経済性を追究し、かつ機能的に過不足のない合理性を満たすことを目的とした建築であったのに対し、「文化服装学院円型校舎」は仕上げや設備を高級に設えた、「服装の殿堂というにふさわしい偉容をもち、内に秘めた伝統ある内容を内外にあらわ」²³⁾すことを意図した、美観及び象徴性の追究された建築としてつくられたものであり、両者は設計趣旨のまったく異なったものである。

- ・坂本の実用新案が「円形校舎」との語句によって登録されていることに敬意を払いつつ、これを下敷きにしながらも異なる趣旨によって実現されたものであることを明確にするため、「円型校舎」との語を用いることされているものと考えられる。

ところで、先に引いた「装苑」掲載の富田の随筆には、次のような記述も見られた^[12]。

提灯といえば、文化服装のあの九層建円型校舎は、
ちょっとばかり似ています。

その頂上のにっかった、人体を象徴化したといわれ
る飾りの尖塔はろうそく立てです。

若い女性に光をあたえる提灯です。

坂本の「円形校舎」が経済性および合理性を追究した
最小限の「純粋機能主義」に基づくものであったのに対
し、「文化服装学院円型校舎」は、豪華で装飾的な、「若
い女性に光をあたえる提灯」のような存在であることを
第一義とした建築であったと考えられる。

注

- 1) 参考文献 [1] では「昭和二十九年九月十五日、地鎮祭と
ともに着工された」との記述があるが、当該作品が発表され
た「国際建築」1955年11月号には「昭和29年10月起工」
(p.51)とあり、近代建築1955年11月号では「起工 昭和
29年10月2日」(p.4)、「セメント・コンクリート」1955年
11月号には「昨年10月に起工」(p.36)とそれぞれ記載され
ている。本稿では、複数の記事に記載のあった「昭和29年
10月」を起工の期日とするのが妥当との立場をとる。
- 2) 参考文献 [1], p.193 参照。
- 3) 雑誌「装苑」1956年1月号(参考文献 [11]) に、「第一
場 木綿」、「第二場 毛」、「第三場 綿」、「第四場 化繊」、「第
五場 模様」、「第六場 絹」の代表作3点ずつが6ページにわ
たって掲載されている。この記事には、各ショーの舞台写真
が見出しに1枚ずつ示されているものの、会場であったと思
われる円型校舎そのものについてや、催事の日時や場所、
内容などの詳細については一切触れられていない。
- 4) 参考文献 [1], p.189
- 5) 参考文献 [14] [15] を参照して記述。
- 6) 参考文献 [1], p.189
- 7) 参考文献 [2], p.34 参照。
- 8) 参考文献 [1], p.189
- 9) 同上 pp.189-190
- 10) 同上 p.190
- 11) 参考文献 [16], pp.7-8 参照。
- 12) 同上参照。
- 13) 同上 p.9 参照。
- 14) 同上 p.4
- 15) 同上 p.10 参照。
- 16) 同上 p.9 参照。
- 17) 同上 p.10
- 18) 参考文献 [1], p.189
- 19) 参考文献 [16], p.8
- 20) 同上 p.19
- 21) 同上 p.20
- 22) 同上 p.157-158 に1952年～1959年までの間に設計が完了
した円形建築作品の所在地、平面形状、階数、床面積等の一
覧が掲載されている。このうち、円形の校舎建築については
54校確認できる。

参考文献

- [1] 大沼淳『文化学園八十年史々木の杜から世界へ 忘れえ
ぬこと、忘れえぬ人—文化学園四十年聞き語り』文化学園,
2003
- [2] 文化学園八十年史編纂室(田原秀子+瀬戸口玲子)『文化
学園八十年史々木の杜から世界へ 写真で見る文化学園八
十年の軌跡』文化学園, 2003
- [3] 近代建築社編「文化服装学院」『近代建築』1955年11月
号(9巻11号), 近代建築社, 1955.11, pp.2-6
- [4] 宮内嘉久編集事務所編「円型校舎・文化服装学院」『国際
建築』1955年11月号(22巻11号), 美術出版社, 1955.11,
pp.51-54
- [5] 日本セメント技術協会編「表紙:—文化服装学院新校舎」
『セメント・コンクリート』日本セメント技術協会(105号),
1955.11, p.36
- [6] 下出源七編「文化服装学院」『建築写真文庫82 各種学校』
彰国社, 1957, pp.4-15
- [7] 新建築社編「しんけんちく・にゅーす 問題の文化服装
学院竣工」『新建築』1955年10月号, 新建築社, 1955.10
- [8] 森山学「昭和30年代に円形校舎が流行した原因に関する
研究—昭和30年代の円形校舎に関する研究 その1」『建築学
会九州支部研究報告』(44), 日本建築学会, 2005.3, pp.753-756
- [9] 梅宮弘光「坂本鹿名夫の実用新案「円形校舎」について」
『学術講演梗概集 建築歴史・意匠』(2017), 日本建築学会,
2017.7, pp.207-208
- [10] 川崎圭祐・大川三雄「『円形建築』にみる建築家・坂本鹿
名夫の設計理念と建築メディアの評価—「円形建築」に関す
る記事を中心として」『平成25年度日本大学理工学部学術講
演会論文集』(57巻), 日本大学理工学部, 2014.12, pp.573-574
- [11] 文化出版局編「文化服装学院円型校舎落成記念コス
チュームショー作品」『装苑』1956年3月号(11巻1号),
文化出版局, 1956.3, pp.72-77
- [12] 富田英三「白いマントの校舎」『装苑』1957年12月号(12
巻16号), 文化出版局, 1957.12, pp.232-233
- [13] 今和次郎「巻頭言 エントウ校舎によせて」『被服文化』
(66号), 文化服装学院出版局, 1960.12, p.7
- [14] 西澤泰彦・杉山雅則「レーモンド事務所の思い出 杉山
雅則氏に聞く」『SD』1988年7月号(286号), 鹿島出版会,
1988.7, pp.41-43
- [15] 鯉坂徹「三菱に所属した12人の建築家」『学術講演梗概
集』日本建築学会, 2012.09, pp.117-118
- [16] 建築総合計画研究所編『坂本鹿名夫作品集 円形建築 附経
済的建築』日本学術出版社, 1957
- [17] 坂本鹿名夫「『円形校舎』の特許(新案)について」『建
築雑誌』(847号), 日本建築学会, 1957.6, p.49
- [18] 近代建築社編「富士見高校—円形校舎・東京練馬」『近代
建築』1955年3月号(9巻3号), 近代建築社, 1955.3, pp.13-
16
- [19] 理工図書編「山崎学園の円形校舎」『建築界』1955年4月
号(4巻4号), 理工図書, 1955.4, pp.20-23
- [20] 彰国社編「組上のにっつた円形校舎」『建築文化』1955年6
月号(106号), 彰国社, 1955.6, pp.47-49

図版出典

- 図1) 参考文献 [3], p.2
- 図2) 参考文献 [16], P.19
- 図3) 参考文献 [16], P.21
- 図4) 参考文献 [2], p194
- 図5) 参考文献 [3], p.2 および参考文献 [18], p.48 をもとに
作成